

○大谷貴美子*、浅野麻理子*、李温九*、金明仙*、韓在淑**、南出隆久*、
畠中宗一***、本村汎*** (*京都府大、**嶺南大、***大阪市大)

【目的】 現在我が国では、女性の就業率の増加、学童の通塾率の増加、食の簡便化などで家族がそろって食事をする機会が減少している。そのような中であって、常識を越えた青少年の犯罪が増加し、改めて家族の役割・家庭の機能が見直されている。そこで、我々は、家族の団らんの象徴ともいえる食卓に注目し、楽しい食卓が、家族のまとまりと子供の情緒的安定をもたらし、そのことが子供の将来の食生活や、家族像にも影響を与えているものと仮説を立て、アンケート調査を行った。調査は、食習慣がほぼ完成されて食事選択を自らの意志で行いつつある中学生と、その保護者を対象として日本と韓国で行われた。今回は、中学生のデータのみを報告する。

【研究方法】 調査は1997年9月から10月に、大阪府、滋賀県、ソウル（韓国）、テグ（韓国）の中学校の協力を得て行われた。アンケート用紙は、親子の対応を見るために、生徒用と保護者用に同じ番号を付け、それぞれを封筒に入れて生徒にわたし、数日後中学校の先生を介して回収された。データの処理はSPSSを用いて行った。

【結果】 生徒のアンケートの回収率は、日本 86.1%（中1 - 171、中2 - 60、中3 - 48名）、韓国 73.0%（中1 - 110、中2 - 123、中3 - 137名）であった。日韓ともに、家族の凝集性、楽しい食卓、将来の家族像、将来の食生活像との間に高い相関性が認められ、家族の凝集性の高いグループ、および楽しい食卓を体験しているグループほど、現在のよな家庭を将来持ちたいと思い、栄養バランスを重視した食生活を志向していた。